ヤンサノエ

会報　2010　No.14

発行　江差追分会
2010.12.14
北海道桧山郡江差町中歌町193-3
TEL 0139-52-5555
FAX 0139-52-5544
ホームページアドレス　http://www.hakodate.or.jp/oiwake/

第１期江差追分セミナー（昭和６１年２月）で本すくりの指導をする青坂満師匠（現上席師匠）

二十六年を迎える江差追分セミナー

江差追分会員の皆さんは、この季刊誌「ヤンサノエ」を通じて江差追分セミナーと言う言葉を聴いたり、多くの会員が参加したことがあると思う。

セミナーとは、ゼミナールのことで、指導者（教師）の指導の下で少人数の受講者（生徒）が行う演習授業のことであるが、これを江差追分に当てはめ、江差追分の本場の師匠から生徒が指導を受け、江差のたば風（東風～北北西の風）に向かって追分を歌ってみませんか―」のキャッチフレーズで昭和六十一年二月に始めたのが、「江差追分セミナー」である。

毎週木曜から土曜日までの三日間、追分会館で師匠は徹底的に「江差追分」を指導し、生徒は少しでも上達したいとの想いから寸暇を惜しまず声を出し、休憩中でもトイレや外に出て声を張りあげている姿は珍しいことではない。

大切な年金や生活費の一部を切り詰め、二十四年間も受講している仙台や札幌の主婦、仕事を休んで二十四年も受講している東京の会社役員、二月の寒い時期に横浜から毎週通うのは大変だからと、二月のひと月を江差に泊まって四回のセミナーに参加してくれた主婦や二週間江差に泊り込む静岡の男性、そのほか大学教授、弁護士、大手会社の社長、著名な詩人、歌手の皆さん等々、二泊三日のセミナーに没頭する姿は真剣以外の何物でもない。

もっと暖かい時期に、との要望から十一月にも開催して三年目、第一回目から二十二年十一月のセミナー迄で延べ、三千二百人の追分愛好者が受講している。

この三千二百人のほとんどの受講者が江差に最低三泊しており、江差の町にとっては大きな経済効果をもたらしてくれている。それ以上に素晴らしいのは土曜日の追分酒場で、指導した師匠を囲んでの談笑、三日間習った成果である格付の昇格を喜び合い、各地の民謡を唄い合いながらの交流が参加者にとっては忘れられない思い出となり、再会を約しながら散会する光景は、何物にも代えられない楽しい場であり、次もまた受講しようと言う誘惑に乗ってしまうようである。会員の皆さん、セミナーに参加してみませんか。

江差追分会副会長　馬川政紀

第四十八回江差追分全国大会

優勝は一般部門　西川　俊昭さん
熟年部門　金子　美詩（みゆき）さん
少年部門　田村ひより　さん

平成二十二年九月十七日から三日間、江差町文化会館で第四十八回江差追分全国大会、及び第十四回江差追分熟年・少年全国大会が開催された。

出場者は一般部門百八十九名、六十七才以上熟年部門百六十二名、中学生以下の少年部門が五十四名で、それぞれに日頃の練習の成果を競った結果、一般の部は地元江差のベテランの唄い手、西川俊昭さん（六〇）が優勝した。三年前に病気で妻を亡くしたという西川さんが、万感の思いを胸に唄った追分も、また、審査発表を聞いて舞台の上で思わず涙したその姿も、甚だ感動的であった。

一般の部ばかりでなく、熟年の部の優勝者の唄も出場者の層が厚くなるにつれて、年々レベルが上がっており、聴衆の感覚からすれば少年の部は別として年齢差によるハンディなども、しだいに無くなってきているようである。

例年、大会の終わりに近江審査委員長から発表される講評において、今年は各部門とも多分に共通すると思われる次のような諸点が指摘された。すなわち（過度の緊張から）唄声が硬くなる人が多いので、もう少し軟らかな発声で唄ってほしい。また、全体にノシ（各節の引き延ばす部分）が浅い傾向があるので、各節とも十分にノシて節に深みを持たせるようにしたい。また、熟年の唄い手に対しては、一部に口の開きが悪いため、声が響かない唄になっている場合があるので要注意。さらに少年の部については、将来性に富む唄が多いが、江差追分の基本になっている八つの節を守って、さらに研鑽を積んでほしい等々の意見である。

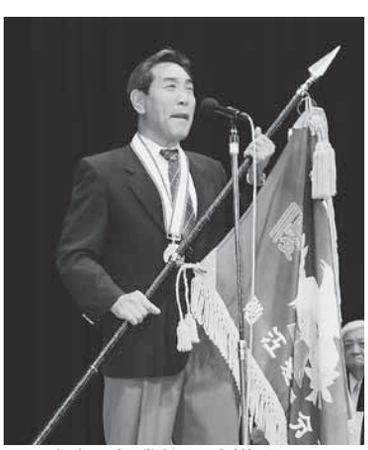
一方、大会の華ともいうべきアトラクションは、今年も三日間の日替わりで、次のような順に華やかに行われた。

初日は、まず、石田久枝さんの総合司会の下、秋田県の小田島会の皆さんによる秋田民謡六曲、二日目は少年少女の追分大合唱に続いて過去における少年・熟年の優勝経験者による追分。次いで渡辺傳次郎師匠の紹介により「西物」を主体とする各地の馬子唄（小諸・鈴鹿）、本挽き唄（日向・吉野）、舟唄（琵琶湖・下津井）がそれぞれ二曲披露された。

最終日は引き続き石田さんの司会により例年のとおり各部門の前年優勝者による追分と歴代優勝者の掛け合い、それに舞台の床一杯に青色の幕を広げて波の動きを表現した沖揚げ音頭等の多彩な演目が演じられた。

第五十回大会を再来年に控え、さまざまな課題を抱えつつも、江差追分全国大会は、今年もまた関係者の努力により幸い大方の好評を博しつつ無事終了したようである。

（学芸担当理事　館　和夫）



一般部門優勝者　西川俊昭さん

一般部門入賞者

優　勝　西川　俊昭（江差町）
準優勝　瀧本　豊壽（深川市）
第三位　井上さつき（北斗市）
第四位　川俣　明彦（埼玉県草加市）
第五位　東　真喜子（函館市）
第六位　貝澤早綾佳（平取町）
第七位　中田　桂敏（岩手県盛岡市）
第八位　大沢　理絵（苫小牧市）
第九位　遠田千鶴子（札幌市）
第十位　佐藤美枝子（札幌市）

審査員特別賞
芹川　三月（ブラジル支部）

江差追分全国大会で優勝した

ひと2010

西川（にしかわ）　俊昭（としあき）さん

「今日の歌を妻に聞かせてやりたかった」。檜山管内江差町で17～19日に開かれた第48回江差追分全国大会で、優勝者の名前が呼ばれると、ハンカチで顔を覆い、涙をこらえることができなかった。胸のポケットには3年前に病気で亡くした妻千枝さんの形見の数珠が入っていた。

江差追分を始めたきっかけは、約30年前の友人の誘い。最初は軽い気持ちだったが、今では「もっと若い時に始めていれば」と思うほど打ち込む。その魅力は「情緒を込めて歌うことの難しさ」。歌が表現する波をイメージするため、2日に1回は江差の浜で海に向かって練習する。

江差で生まれ育ち、27年間、道立江差病院で事務職員として勤務。定年後も嘱託で働いている。忘年会などで「歌って」と頼まれると、断れないほどの人柄の良さ。

7年前に心筋梗塞を患い、一時は江差追分を離れた。続けるか迷っていた時に「このまま終わるのはもったいない」と声をかけたのが、同管内乙部町の坪田昭信師匠。「再び江差追分への情熱を注いでくれた。今の自分があるのは師匠のおかげ」と感謝を忘れない。

千枝さんは生前、大会前にいつも「力まずに」と声をかけてくれたという。「力まずに歌えました。お墓に行って日本一の報告をして来ます」

趣味はスキー。24歳の次男と2人暮らし。60歳。

（照井誉之介）

平成22年9月21日　北海道新聞

熟年部門入賞者

優　勝　金子　美詩（岩見沢市）
準優勝　榎本弥惣七（網走市）
第三位　菅井　妙子（小樽市）
第四位　小野寺安喜（東京都練馬区）
第五位　飯村　幸子（函館市）
第六位　木田　弘（札幌市）
第七位　上野　勲（阿寒町）
第八位　藤本　哲（倶知安町）
第九位　岡崎　豊秋（山形県天童市）
第十位　斉藤　荒司（栃木県宇都宮市）

熟年部門優勝者　金子美詩さん

少年部門優勝者　田村ひよりさん

少年部門入賞者

優　勝　田村ひより（江差町）
準優勝　竹野　留里（室蘭市）
第三位　沼田　彩香（函館市）
第四位　大木　風香（札幌市）
第五位　田村つくし（江差町）
第六位　前川みどり（江差町）
第七位　石坂　竜巳（千歳町）
第八位　福田　花梨（厚沢部町）
第九位　大西莉華子（千歳町）
第十位　東　美羽音（函館市）

審査員奨励賞

甲島　純奈（函館市）
田中　菜々（江差町）
西口真由奈（奈良県大和郡山市）
鈴木　清か（愛知県みよし市）
小田桐結香（千歳市）

特別寄稿

秋濤や江差追分

まだ耳に（下）

波戸岡　旭

しばらく、買い物コーナーで、青坂満氏の伝記『たば風に唄う』を買って見ながら待っていました。やがて彼が帰って来ました。こういうのです。「今、唄える人を探していたのですが、皆さんもう帰られてしまいました。もう、ちょっと待って下さい」と言って、携帯電話を持って、また向こうに行かれたのです。びっくりしました。実演は二時半までなのです。もう五時に近い時刻です。それに館内に居るのは私ども四人だけなのです。それなのに「せっかく来たのだから、聴かせてあげよう」というわけなのでしょう。そういえば、さきほど「どこからいらっしゃったのですか」と聞かれたので、「横浜です」と答えていたのでした。それにしても、ふらりと来た一観光客にすぎない我々への親切。なんだか目頭が熱くなりました。

それから、十分くらい経った頃、事務所の方から、館長さんが二人の男性と一緒にやってきました。「この方たちが、今、唄いますのでどうぞ聴いてください」とおっしゃるのです。一人は私と同じ歳くらいの方、もう一人の方は、三十代半ばくらいに見えました。手には水道管を持っています。私はすぐ尺八の替わりだな、と気がつきました。「すみません。尺八を取ってくる時間がなくて」。ロビーには他にはだれもいません。私たちは椅子に座らせていただき、棚橋健蔵さんという師匠と尺八の福原さん（桧山企画）は、われわれから、四ｍほど離れた壁よりに立たれました。そして、館長さん（小田島さん）が、「すこしだけ、江差追分の唄を説明いたします」と前口上をしてくださいました。

私は、もうすでに胸がいっぱいでした。「本場の江差で聴くことができたらなぁ」とは、江差に向かう途中、かすかに期待しなくはなかったのですが、時刻が遅すぎるから、まずは無理だと思っていたのに、いま、じかに、わたしどものために唄ってくださる。こころよく駆けつけてくれた棚橋師匠・福原さんにはもちろんですが、ここまで手配してくださった小田島さんに、私の心は熱くなっていて、じつはもう胸にうれしさと感謝の気持ちがいっぱいに込み上げてきていました。その小田島さんが、「この江差追分の唄は、北陸や東北の次男坊三男坊たちは、故郷では貧しくて、家は長男が継ぐので出てゆかね

ばならず、北海道へ行く。難破や遭難の危険を冒して、生まれて始めて荒波の日本海を小船で運ばれる。船酔いと恐怖とに何日も何日も耐えて、やっと蝦夷地がかすかに見えた、というそのよろこびの気持ち、それが『あれが蝦夷地の山かいな』という歌詞の意味なのです」と解説してくださった。私は、その次男坊・三男坊たちの思いつめた気持ちを感じてしまい、もう我慢ができなく肩を震わせて泣きだしてしまいました。

〽国を離れて蝦夷地が島へ
　ヤンサノエー
　幾夜寝覚めの　浪まくら　朝な夕なに
　きこゆるものはネ
　友よぶかもめと浪の音
〽かもめのなく音にふと目をさまし
　あれが蝦夷地の　山かいな
〽なにを　夢見て泣くかよ千鳥ネ

ここは江差の　仮の宿

私は「あれが蝦夷地の山かいな」という歌詞に、今まで迂闊（うかつ）にもずっと、悲しみの情ばかりを感じ取っていたのでしたが、むしろよろこびの意であることを知ったことにも、胸うたれました。が、ますます泣けてきたのは、その唄の中の若い衆たちのことです。故郷を捨てて、命がけで渡ってきた次男坊三男坊たちのせつなくひたすらな心です。「なにを夢見てなくかよ千鳥ネ」という歌詞もありますが、むろん、泣いて夢見るのは、故郷を捨てた若者たちですが、それを千鳥の鳴き声と言い換えるのです。民謡のうたごころは、そのように、激しくやるせない人の情を、やさしくつつむように自然の花鳥風月のこころに詠み替えます。が、このとき、私は、ふっと不覚にも、自分の十九歳の春、不安を抱えて上京した時のことを思い出してしまいました。それは、故郷を離れるつらさよりも、拠りどころのない前途の不安に押しつぶされそうになりながら、それでも行かねばならないと自身を励ましつづけた時の自分が、いまさらにいじらしく健気（けなげ）に思えてきてしまったのでした。唄の中の若者たちの身の上を思いやる気持ちが、うっかり私自身の思い出に重なってしまったわけなのです。そこに、棚橋さんのハリがあり艶のある朗々たる唄声が響きわたり、私の全身を包みこみ、胸奥にしみこんできたのです。涙がとまりません。恥ずかしさも忘れて、泣けて泣けてしかたありませんでした。

後日、棚橋師匠のお住まいは会館から車で十分の所だとのこと、その節は小田島さんに電話で呼び出されてすぐ来てくださったとのことなどを知りました。ほんとうにありがたい出会いでした。

さて、八月半ばのある日、私は「天頂」十周年記念号（私の主宰する俳句結社）の依頼原稿のことなどを考えていたときのことです。同時に祝賀会のことも気になっていました。これまで何度も何度もいろいろ考えてきていたのですが、アトラクションが決まらないでいたのです。が、その時、はっと気づいたのでした。「江差追分がいい。自分だけでなく、天頂の皆さんにもこの感動を味わってもらいたい。江差追分の詩ごころを味わうこと、これこそ天頂の十周年記念の祝賀会に相応しい」と。すぐ、小田島さんに電話をかけました。関東にもたくさんの江差追分の支部があることは、会館の展示で知っていましたから、小田島館長さんにご紹介していただくことにしました。かくして、本祝賀会には、東京神田会の指導者で関東十九支部全体の会長の伊藤良三師匠におでましを願うことができた次第なのです。その大会当日（平成二十一年十月三十一日）。天頂会員の皆さんは、目の前でじかに「江差追分」を拝聴するのははじめての方がほとんどでした。どなたもが「伊藤師匠の哀調を帯びたすばらしい唄声に、心が震えました」「しみじみ心にしみ入り、深く感動しました」と大好評でした。場内は大変な感動で、しばしし―んとなりました。そこでその緊張をもう一曲「江差三下り」でほぐしていただいた次第でした。

近い冬、私は、今度はひとりで、江差本線の電車に乗って、厳寒の江差に行こうと決めています。

國學院大学文学部教授（専攻分野 日中比較文学・日本漢文学）・文学博士

第五十回記念江差追分全国大会
検討委員会が答申
テーマ「感謝と創造」

昭和三十八年に第一回大会が、本州から三名の方々の参加を得て、七十七名が江差劇場に集い、歴史的な第一歩を踏み出しました。以来、試行錯誤を重ねて、今では、選抜大会に千人、大会決選会四百人の出場者がある。国内で最も、歴史と伝統を誇る民謡の大会に成長してまいりました。いよいよこの大会も再来年が第五十回大会という節目の大会を迎えます。

当会では、本大会の企画検討委員会（委員長　熊野正宏）を設置して、十五名の委員の方々と議論した結果を、濱谷一治会長に答申いたしました。その概要は次のとおりです。これを基にして、今後理事会等でも議論してまいります。

一　大会テーマ「感謝と創造」

「感謝」…半世紀と言う五十年間の長きにわたり大会を開催してこれたことに対する多くの追分関係者への江差町民からの謝意。

「創造」…五十年を振り返り、追分節の原点に立ち返るとともに、情緒ある本来の江差追分節を追及し、新たな未来の追分を創造する。

二　主な事業内容

○期間　一週間程度とする
（大会期間の三日間含め）

○内容

・大会　従来どおり。

・アトラク　歴代優勝者のうた・尺八連管・子供大合唱・会員で各種民謡大会優勝者の唄他。

○シンポジウム

江差追分の今後の進むべき方向や五十回大会以降の大会のあり方等についての招聘者の意見を拝聴する。

○パネル展

これまでの大会を回顧する写真展示会。

○追分の歌詞募集

○往時の町並みのタイムスリップ

・浜小屋節、新地節・積木石節が唄われていた頃の町並み再現。

・追分関係施設の紹介。

平成二十二年度秋季
江差追分セミナーに四十一名参加

今年で三回目となります。受講者数は前年比四名の増加となりました。受講者の皆様有難うございました。

左記に受講者みなさんの声を集約しました。改善できることは、早期に対策を講じて参りたいと考えております。

【意見・要望等について】

○クラス分けでは、同級を集約するのではなく、上級者も初心者も入り混ぜてほしい。

○町長さん・はじめ町職員の方々にも是非この唄を習得してもらい、全国に宣伝マンとしてピーアールしてほしい。

○貴重な文化遺産を後世に伝承していくため、このレベルを維持していってほしい。

○高齢者が多くなってきているので、「高齢者クラス」の検討もしてはどうか。

○地元支部の稽古を見学したかった。

○秋季は雪がなく、受講するのが楽で良い。

○クラスに女性が独りだったので、そい掛けの稽古ができなかった。

○尺八伴奏が三日間ほしかった。

地方格付審査会終了する

今年の審査会は、北海道日胆地区の白老（しらおい）町で七八名の受講者を集め、左記のとおり実施しました。昇級された方々おめでとうございました。また、保留となった方々もこれに懲りずに次回までに、指導事項を調整の上、挑戦してください。

地区運営協議会の役員及び会員の皆様お世話になりました。ありがとうございます。（次年度開催予定　道東地区）

昇級率　六十三％

審査員　近江八声・房田勝芳
渋田義幸・高清水勲
菊地　勲

江差追分「笑いなげき節大会」を終えて

江差町上町地区本町、橋本町周辺の若手商店主の団体、光芽会の集まりで誰からともなく毎年江差追分全国大会に多くの方々が来町していただいております。

なんとかこの方々を歓迎し、暖かくもてなしをすべきでないかとの提案がされ、どうせなら、我々も追分を習ったらどうかとの声におされて、光芽会、会員十数名で浅沼春義師匠（現正師匠）のもとで週二回の練習が始まりました。

しかし、午後九時にシャッターをおろしてからの練習はそう長く続くはずもなく、いつからともなく中止になりました。それならせめて全国大会で歓迎のイベントをやろうと取り組んだのが、今回の笑いなげき節大会であります。

資金は全額負担して、三平汁、焼き魚、ビールなど郷土料理で暖かくお迎えをし、力及ばず決選に出場できなかった人や関係者に本場追分会館の舞台でもう一度唄っていただき、さらに本場江差の師匠からアドバイスをいただき、ウイットに富んだ各賞を用意し、大変感謝と好評を博し長年に渡り開催してまいりました。ときには参加者を絞るのに苦労したこともあり、事前に全国の支部に参加者を調査したりもいたしました。この大会も二十年ほど続き一定程度の役割を果たしたとのことで、五年ほどまえに発展的に一時中止をしておりました。

一方江差町議会では、今年より議会としても江差町の町づくりや、活性化をとり進めようと「経済産業活性化対策に関する調査特別委員会」をたちあげて一次産業、商業観光、追分関係者との意見交換や調査を進めたなかで、再来年の追分全国大会五十周年記念に向けて我々議会も行動を起こそうと、この度の「笑いなげき節大会」の開催になったのであります。準備期間も少ないこともあり、追分会や町職員管理職の応援も頂き、若干ですが入場料を頂き開催することができました。十分な案内や、ＰＲも出来なかったので多少心配はありましたが、以前もおいでいただきましたなつかしい方々の参加もありました。参加者の皆さん方は三平汁や焼き魚を食べ、それぞれの追分節を笑い、我が唄をなげき、高清水勲正師匠の一口アドバイスに感激をし、会場を後にされました。

来年以降ももっとこの大会を進化させて、江差追分や五十周年記念大会を議会としても支援してまいります。

江差町議会議員会　会長　飯田　隆一

地区・支部コーナー

札樽地区運営協議会創立三十周年記念
「江差追分フォーラム」盛大に開催！

昭和五十五年五月に当協議会が創立され、本年をもって三十周年の節目を迎え、記念事業として開催。

十一月二十三日（祝）午前十時三十分、この季節としては、暖かく好天にも恵まれ、会場の「札幌サンプラザ」には、民謡ファンがぞくぞくと足を運び、支部会員の他一般市民と合わせ、約六〇〇名の溢れんばかりの盛況、会場は終始熱気に包まれ、江差追分一色となり盛り上がりを見せた。

追分会より、会長濱谷一治様をはじめ、本部役員並びに各師匠の派遣をいただき、それぞれの役務に携わっていただき、一同感謝いたしております。

午前中は、房田勝芳上席師匠により、「江差追分の歌い方」として研修会を行い、追分の「声の使い方」「本スクリ」「止め」等の表現を解りやすく説明、受講された皆さんは大変満足されておりました。

午後からは、「江差追分の魅力」について、師匠会近江八声会長、続いて「追分と人生」について、菊地勲師匠両名の講演、「追分のルーツをたずねて」では、追分会理事高田裕氏の追分のルーツについて、係わりのある唄、古老達の唄を交えながら解説進行し、また「時代を担う若き歌声」と題して、札幌市内の小中学生二十名による活気のあるはつらつとして江差追分の合唱、最後には、当地区協議会の全国大会歴代優勝者十一名による熱唱等盛りだくさんの事業を展開し、来場者は、席を立つ者もいなく懸命に耳を傾け、盛会裡に「江差追分フォーラム」を終えました。

この後に、式典を執り行ない、ご

来賓の追分会会長濱谷一治様、前副会長・顧問青坂満様、他団体の会長よりご祝辞をいただき、副会長の馬川政紀様の祝杯により会が進められ、アトラクションもあり、二二〇名の出席者が長い一日をどっぷりと江差追分に漬かり、終始和やかな雰囲気の中、無事事業を終えることができました。

各方面から絶賛をいただき安堵しながら、江差追分の普及啓蒙の一助となれればと祈念しております。

追分関係各位、各団体に感謝の意を表します。

江差追分会札樽地区運営協議会
会長　吉田翠山

第四十八回江差追分全国大会アトラクション
「唄は旅人、追分節のふるさとから」上演後記

全国大会を二週間後に控えた九月三日。関西地区によるアトラクションの依頼を受けた。わずかな準備期間での企画に頭を悩ませたが、「ナレーションで綴る追分節の旅」という私案に、各支部長が快く協力してくださることになった。唄、演奏共に素晴らしく、企画は好評を博すことができた。各支部長はじめ出演者の皆様に深く御礼申し上げたい。ここに脚本の一部を紹介する。曲目と共に追分節の旅を改めて感じていただければ幸甚である。

一、小諸馬子唄（森信佐句　愛知尾張支部長）

「さらしなは右　みよし野は左にて月と花とを追分の宿」追分節のふるさと長野県北佐久郡軽井沢町追分。その西のはずれ北国街道と中仙道の分かれ道にある「分去れ」。その常夜灯前に刻まれた歌である・・・。

二、鈴鹿馬子唄（鈴鹿馬子唄、森田力志　兵庫県尼崎支部）

・・・飯田からは三河の海から続く「塩の道」三州街道を下り「菅江真澄」のふるさと三河へ「まちは西まちさかりの津花、沖をながむる　山の上」二二〇年前の江差追分を書き残した「真澄」のふるさと岡崎から東海道へ入る。熱田から桑名へは舟に揺られる七里の旅。亀山からは山道、京の都を目指す旅人に鈴鹿峠を・・・。

三、琵琶湖舟唄（斉藤　勲　東大阪支部長）

・・・江差湊を出た北前船は、京の都を目指す風「アイの風」に乗って進む。やがて、越前の敦賀湊に入ると、陸路、琵琶湖の北の端、塩津へと運ぶ。そして琵琶湖に・・・。

四、下津井舟唄（松村善樹　大阪春風会支部長）

・・・北前船が瀬戸内に入る。平清盛が開いた難所「音頭の瀬戸」をかわし、備前「下津井湊」を目指す。やがて、下津井湊から出迎えの舟が・・・。

五、日向木挽唄（河内正二　宮崎支部長）

・・・いつの日からか、船頭の唄った舟唄が木挽の仕事の唄、心の唄として安芸の国の山々にこだまする。そして木挽は山から山への渡り鳥「安芸の国」の山から「日向の国」の山々へ・・・。

六、吉野木挽唄（仲村菊江　大和菊華会支部長）

・・旅人の終着地は「花の吉野」。・・・「祈りの道」は「追分の道」。「吉野山　峰の白雪　ふみわけて　入りにし　人の跡ぞ　恋しき」と静御前が義経との別れを唄う吉野。そして「吉野の花」と共に散った都の夢。千本桜に包まれて響く木挽きの唄・・・。

尺八伴奏：木下三郎（大和菊華会支部）
森田力雄（兵庫県尼崎支部長）
脚本・ナレーション：渡辺傳次郎（愛知三河支部長）

江差追分会関西地区運営協議会
会長　渡辺傳次郎

事務局からのお知らせ

一　江差追分セミナー（第二十六期）の開催

今追分を唄っていて、その唄い方に悩んでいる方、セミナーで解決してみませんか。

今回は次のとおりの日程です。

と　き　平成二十三年
第一週　二月三・四・五日
第二週　二月十・十一・十二日
第三週　二月十七・十八・十九日
第四週　二月二十四・二十五・二十六日

ところ　江差追分会館

受講料　一万五千円

二　資格認定審査会の開催

今年度の審査会は、次のとおり開催いたします。地区運営協議会には、その旨周知いたしますので、申請者は、所属の地区運営協議会に必要な書類を提出するとともに、地区運営協議会は、三月一日までに事務局に申請願います。

と　き　平成二十三年三月二十日（日）
午前九時（予定）

ところ　江差追分会館

認定区分　師匠・準師匠・講師・準講師

たくさんの尺八のご寄贈有難うございました

過日、江差町教育委員会より尺八提供の要請を受け、各支部の皆様方に依頼申し上げましたところ、次のとおりたくさんの方々よりご寄附の申し出がございました。

当会では、この尺八を教育委員会を通じて、江差北中学校にお渡しをいたしました。どんな尺八の音色での演奏をしてくれるのか楽しみです。

ご寄贈者名（敬称略）

菅野　繁子　旭川南支部長
竹一本
吉田　翠山　札幌山鼻支部長
竹二本
長田紀美雄　滋賀淡海支部長
プラ成型五本
小林　悦山　ＮＰＯ法人青少年と伝統芸能を育てる会理事長
塩ビ管　七十本
熊野　正宏　登別笛吉会支部長
竹他十一本

近江八声師匠会会長・松村隆理事　音楽科の先生前に熱弁！！

現在西洋音楽が学校授業に取り入れられていますが、今後民謡をいかに授業の中に取り組んでいくのかをテーマにしたワークショップで講師として、招かれ熱弁をふるった。

江差の風・海の香り・波の音を想像しながら、息を合わせて「ソイ～ソイッ」

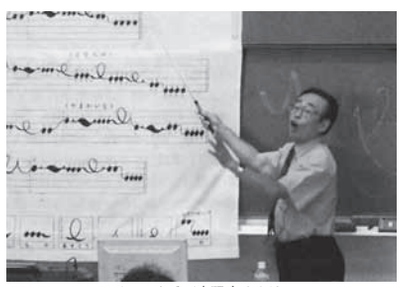
松村隆氏の講演で江差追分の歴史を学ぶ

「ソイ～ソイッ」「かも～め～……」師匠の唄に導かれ、参加者の熱気あふれる声が響く。北海道を代表する民謡、江差追分に果敢に挑戦する参加者。江差の風・海の香り・波の音を想像しながら、みんなで息を合わせてもう一度……。

日本音楽教育学会は、これまで夏期ワークショップを東京で隔年開催してきたが、今年から全国各地区で開催することになった。今回の札幌でのワークショップは、江差追分の歴史・文化と歌唱の基礎を体験的に学ぶ企画である。講師は江差追分界の重鎮、近江八声氏（江差追分会師匠会会長）と松村隆氏（江差追分会理事）。

午前は松村氏の講演で江差追分の歴史を学ぶ。信州馬子唄の追分節と越後の謙良節（けんりょうぶし）が、北前船で東北地方日本海沿岸の地域を経て北海道松前に伝播したことや、漁港・商港の最盛期にうたわれた浜小屋節や新地節など多くの唄が幾多の変遷を経て溶け込んでいることなど、豊富な資料でわかりやすく解説された。講演中には、近江氏の唄も実演され、歴史的・文化的背景を体系的に理解できた。

午後は、いよいよ正調江差追分の本唄を歌う。微妙なメリスマの節回しを、八つの基本要素（出だし・せつど・二声あげ・もみ・本すくり・すくい・半すくり・止め）に分解し、一つひとつ声に出して確認しながら繋げていく。近江師匠の、波のうねりを思わせる変幻自在な声の表情を何度も真似る。当然なかなかうまくいかないのだが、みんなで何度も歌っていくと何となく雰囲気が醸し出されてきて、ますます夢中になってしまう。



変幻自在の声で近江八声氏が表現するのは……

ワークショップの最後は、江差追分を世界に発信する江差町や江差追分会の取り組みが紹介され、郷土の文化としての江差追分の過去・現在・未来を体験的に展望できた。

鑑賞教材にとどまらず、音楽科教育における江差追分の可能性を実感し、その魅力を存分に満喫した一日だった。

【教育音楽・音楽之友社発行より抜粋】

【編集】岩淵啓介・松村　隆
館　和夫・高田　裕
【企画】江差追分会事務局